

The image of women in *The Great Mirror of Male Love*, or *Nanshoku Okagami* : a diluted father and son relationship

『男色大鑑』の女性像
—希薄な父子関係—

NAMIHIRA Hachiro • SHIKEMBARU Asako
波平八郎・志堅原あさこ

『男色大鑑』の女性像 ——希薄な父子関係——

波平八郎¹⁾・志堅原あさこ²⁾

はじめに

『男色大鑑』^{なんしよくおおかみ}(1687 刊)は井原西鶴作の浮世草子である。男色の関係にある美少年(若衆)とそれを寵愛する年長者(念者)にまつわる男色の逸話をまとめた作品である。これまで、西鶴の作品における女性像は西島孜哉¹⁾や齋藤優香²⁾、趙賢廷³⁾らによって研究されてきた。いずれも西鶴の描き出す女性たちが当時の封建的な倫理観に縛られずに主体性をもつ人物であることを論じている。しかし、『男色大鑑』に登場する女性についての言及はほとんど見当たらない。そこで、本稿では『男色大鑑』における女性像の検討を試みた。あわせて、その父親像の検討も行った。

若衆の描写が中心の同書において、あえて女性や父親の描写を分析したのはそれらが「観察者効果」によらない表現となっていると考えられるからである。観察者効果とは、見られていると意識したときに行動が変化する現象である。西鶴は『男色大鑑』において読者を意識しながら若衆を描写したと考えられる。その際、観察者効果により多少の誇張などが生じることが推測できる(いわゆる「盛る」という現象)。一方、若衆の物語において女性や父親については西鶴も読者も比較的無頓着である。そうするとそこに誇張などが混じることは少なくなると考えられる。そのため、西鶴の女性観、家長観がより明確になる。

『男色大鑑』で女性が登場する篇は 29 篇、登場しない篇は 11 篇⁴⁾である。その女性像は武家の男色を中心にした前半(巻 1～4)と歌舞伎若衆の列伝である後半(巻 5～8)で異なる。以下、『男色大鑑』に見られる女性を若衆や念者との関わり方から分類して論じる。

1. 嫌われる女性

前半の巻にみられる女性の型の一つは嫌われる女性である。嫌われる女性を確認するにあたり、女性が男色ではどのように認識されていたかを確認する。まず、板坂則子⁵⁾は『男色大鑑』から武家世界の男色と歌舞伎若衆世界の男色の違いを論じている。そのなかで、武家世界の男色における女性嫌悪の姿勢を次のように述べている。

若衆を好む以上、女色は忌むべき対象である。強い女性嫌悪の気配が、男色の世界には漂っている。若衆も念者も、男色対象となる期間においてのみ女性を退けて男色

1) 沖縄県立芸術大学 2) 沖縄県立芸術大学芸術文化学研究科(博士課程)学生

を嗜むのではない。本来的に女性を忌む姿勢が、若衆を聖的な者として崇める下地として必要なのである。

それにくわえて、歌舞伎若衆世界にある女性嫌悪についても次のように述べている⁶。

それにしても、「男色」は「女性を忌むもの」であり、若衆と契りを結ぶ念者にはこの傾向がことさらに強く見られることは、男色の特性を見るときに重要である。この志向は、武家を離れて歌舞伎若衆の世界になっても、ややもすれば出てきていたことを覚えておきたい。

このことから、『男色大鑑』では武家世界でも歌舞伎若衆世界でも女性を嫌悪する姿勢が男色には求められるように描かれていることがわかる。

次に、佐伯順子⁷は『男色大鑑』や男色と女色の優劣を論じる『田夫物語』、『葉隠』などの言説から江戸期における男色の特質や変化を論じている。そのなかで、男色における女性排除と女性蔑視について次のように述べている。

逆に男どうしの恋は、歌舞伎や武士といった男性のホモ・ソーシャルな職業集団を背景として、環境的に発生する〈親密性〉（いわば同業者間の仲間意識や意思疎通）を基盤とし、公的にも私的にも、心的にも身体的にも強固な絆を構築する。

このあと、佐伯は「歌舞伎や武士といった男性のホモ・ソーシャルな職業集団」は「女性の軽視や排除を前提とした」もので、近世の女色と男色はいずれもホモ・ソーシャルな社会基準によって構成されていると考察を展開している。

佐伯の研究からは男色が女性軽視や女性排除を前提とする男性のみの共同体の基準によって構成されたものであり、男性同士の結びつきを強固にするものであることがわかる。

そのほかに、実社会のなかの男色における女性嫌悪も確認しておきたい。三橋順子⁸は江戸時代に男色好みを示した薩摩藩の「兵児二世」制にも女性嫌悪が濃厚であると述べている。兵児二世とは、青年と元服前の少年で構成される組織である。

女性嫌悪については、女性と性的関係をもたないことはもちろん、会話することもタブーとされた。（中略）そうした女性を嫌悪する傾向は、他藩の武士階層にもあり、儒教教育に由来するものと考えられるが、薩摩藩のそれはより強烈で、根深いものがあるように思う。

以上のように、先行研究では主に江戸時代の男色や『男色大鑑』はホモ・ソーシャルな集団の基準によって構成されており、女性の軽視や女性の排除を前提とするものであると考えられていることがわかる。

それでは、『男色大鑑』でどのように嫌われる女性が描かれているかを見ていきたい。まず、嫌われる女性の特徴として物をねだることが挙げられる。「この道にいろはにほへと」（巻1の2）と「詠めつづけし老木の花の頃」（巻4の4）では花見にくる女性が物を

ねだる。「この道にいろはにほへと」は、女嫌いゆえに賀茂山に隠れ住む手習い屋・一道の話である。本話では「色のある女」が塩をもらいに来たり、箸を借りに来たりする。一道は嫌悪のあまり、顔を見ても返事もしない。花見から帰る女性たちの姿は次のように描写されている⁹。

女はさわがしく、木綿足袋をぬぎて袂に入れ、銀の筭を楊枝にさし替へ、櫛も鼻紙袋にをさめ、紅の脚布を内懐にまくりあげ、上着の衣裏をかなしみ、首筋を取りのけ、木の枝に懸け置きし木地笠をとり／＼に、いそぐや暮の面影、今朝とは見ぐるしき、町の女房のよろしからぬ事ばかり目にかかりぬ。帰るさに生垣よりのぞき、肴懸けを見て、「出家でもないが見ぬ顔をしをる」と、声高にしかる。

若衆の振袖姿の美しさが細かく描写されるのに対して、女房たちの姿は慌ただしく、みっともない格好になっていく過程が細かに連ねられる。冷遇されたことを大声で怒る様子から、気の強い性格であることも読みとれる。

もうひとつの「詠めつづけし老木の花の頃」は、63歳の玉島主水と66歳の豊田半右衛門が人目を忍んで谷中に暮らす話である。花見の途中、急に雨が降り始めたため、女中たちは二人の軒下に雨宿りする。

「かかる所に近付きもがな。せんじ茶涌させて晩方まであそびて、傘を借りて、様子によつて夕食も振舞はば食うて帰るべきに、ここに心当てなき」と、こいきすぎたる女、戸を少し明けて内を覗きける。

女中は図々しい性格である。女中の足音は「ねだりくさき足音」と表現され、作者は「こいきすぎたる女」と批評する。嫌悪の対象となる女性は物欲しそうで出しゃばりな性格として読み手に提示されている。

さらに、「雪中の郭公」(巻2の5)でも世慣れた奥女中・明石が浪人に時鳥を求めて訪ねてくる。

このように、ねだりに来るのは嫌悪される女性に共通する特徴である。物をねだる女性を嫌悪する視点は、男色と女色の優劣を比較する冒頭の篇「色はふたつの物あらそひ」(巻1の1)にも確認できる。ここでは、「百物語に若衆の化物出ると、去った女房のねだりにもどると」と若衆の化物よりもねだる女房の方が劣位に置かれる。その前の記述では、「気のかたわづらふ女房あつかうて居ると、切々無心いはる若衆持ちて居ると」と肺病の女房よりもお金を貰いに来る若衆の方が優位に置かれている。このことから、ものをねだる行為が非難されるべきというよりも男色の世界に見られる女性嫌悪が要因にあることがわかる。女性嫌悪の特徴が顕著に表れているのは、「東の伽羅様」(巻2の4)や「中脇指は思ひの焼け残り」(巻3の3)である。この二篇の嫌われる女性たちは若衆と念者の恋の進展に直接は影響を与えない脇役として登場する¹⁰。

「東の伽羅^{あづま きやら}様」は薬屋の息子・十太郎が町人・伴の市九郎を見初めて情を交わす話である。市九郎が宮城野で目撃する二人の人物の姿は「加賀笠^{か ががさ}ふかく、袖下^{そでした}ながく、後帯^{うしろおび}のやうすは、いづれも念者のありさうに」と若衆らしい。しかし、老女が「これおふじ様、およしさま」と呼ぶことからその人物は少女だと判明する。勘違いした市九郎は「さては人の小娘め」と唾を吐き捨てる。少女たちは姿しか描写されておらず、性格は不明である。性別が女性というだけで嫌われている。これ以降、少女たちは現れないことから、本場面は市九郎の「女嫌ひ」を示すための挿話だと理解できる。

そして、「中脇指^{ちゅうわきざし}は思ひの焼け残り」では女性^{おんな}は遺骨でも嫌われる有り様である。友人の女房の遺骨を持つ半助に連れの男性は次のように言う。

男笑うて、「愚かなる人や。女の焼灰^{やけばひ}なればとて、衆道^{しゅだう}を好ける人の手に持つ事は」と申せば、誤りて、かの女の骨^こは濁江^{にごりえ}になげ捨てしに、沢瀉^{おもだか}・水路^{みづぶき}の葉^はがくれに沈みぬ。

このように、女性たちは性別が女性であるということで衆道に徹する男性から一方的に関わりを絶たれていることが分かる。それは、生まれたとき男色についての知恵があったら、「女の乳^{ちち}は呑むまじ」（巻1の1）と決心するほどである。これらの嫌われる女性たちは前半の巻に集中していることから、武家世界の衆道で重視される「女嫌ひ」の態度を示すために描き出されていると考える。

2. 親族関係の女性

つづいて、若衆や念者と親族関係にある女性を見ていく。前半の巻には集中して21人もの母親や妹、姉^{お姉}などが登場する。後半の巻の「恋の主体としての女性」（3節）や「群衆としての女性」（4節）と比較して親族関係の女性^{おんな}は若衆や念者と固く結ばれている。

まず、「塙^{かき}の中は松^{うち} 楓^{かへで} 柳^{こしつき}は腰付」（巻1の3）の玉之助の母親から確認する。本話は玉之助が小姓として奉公に出された江戸で御番所の侍・笹村千左衛門に執心されて契りを結ぶ話である。母親は次のように描写される。

女は山城の国来栖^{くるす}の小野の奥そだちなりしが、年久しく一条村雲^{むらくも}の御所に宮づかひして、親里^{からうす}の碓^{うす}の音も、今は玉琴^{たまごと}に聞き替へ、同じ油火^{しやうめい}も松明進むると云ひなし、賤^{しづ}の家の糠味^{いへ}噌^{ぬか}までも、酒塵^みと言葉^やを改め、物ごとやさしく良きを見習ひ、風儀^{みやこがほ}もそれにつれて都顔^{みやこがほ}になりぬ。

花見に来た女房や女中は忙しさや庶民性が強調されている。これに対して、玉之助の母親は田舎育ちであったが上品で優美な言葉遣い、都風な振る舞いのできる洗練された女性であることが示されている。性格や姿が明らかにされるのは玉之助の母親のみである。

そのほかの母親たちは若衆との絆が強調されて描かれる場合や存在が示唆される場合がある¹¹。たとえば、「形見は二尺三寸」（巻2の1）の寵童・勝弥は母親の書き置きによっ

て父親の敵討ちを思い立つ。また、「傘持つてもぬるる身」(巻2の2)の小倫の母親は男仕事の「傘の細工」を行う健気な女性であることが語られる。このように、母親たちの登場人数の多さや息子を案じる姿ばかりが描かれていることから、『男色大鑑』の母親と若衆たちの絆は深いとわかる。

ただし、親族の絆を示すのは母親たちに留まらない。「墨絵につらき剣菱の紋」(巻1の5)では妹が登場する。本話では浪人・島村大右衛門が春田丹之介を陥れる竜右衛門の下男を捕らえたことから恋が始まる。大右衛門の出生とあわせて二人の妹について述べられる。

さしつぎの妹は丹波の笹山にありしが、夫に離れて後世を捨てて、河内の国道明寺に、一九の夏衣を墨に染めし以来、身の取奥きの便もなかりしに、過ぎつる五月頃、音信の文書きて名物の花粉などを送る。心ざしは万里に届きて、今鹿児島の水に浮けて、折節の暑さをしのぎ、汗は泪に替はり、むかしをおもふ振袖の面影、地紅の帷子を好いて着た物をとなげきぬ。

一人目の妹は夫を亡くして出家した人物である。あわせて、この妹の昔の姿を思い出して涙ぐむ大右衛門の姿も綴られており、大右衛門が妹思いであることが読みとれる。もう一人の妹は14歳で嫁いでおらず、老母と鹿児島に越してきた。14歳の妹の紹介のあとには「若年にて父におくれしに、島村大右衛門といはるるも、これ皆母人のはたらき、あだにも存ぜず」と大右衛門が母親思いであることも示される。大右衛門を見習って妹たちも「孝をつくせり。人の親はかくあるべき事なり」と兄妹の孝行ぶりが述べられる。14歳の妹と母親の姿は「色よき娘を母の親の先に立て、はしたまじりに茅華・土筆・雞腹摘むなど、都めきたる様子者」と都風である。また、大右衛門が丹之介との逢瀬の帰りに藤井武左衛門の矢に射貫かれて死に至る場面では「母妹のなげき目もあてられず。『命あるゆゑにうき事も見し』と死人に取りつき、刀に手を懸けし事二三度もせしが」と描写される。このように、大右衛門家族の絆は本話の最後まで強調されている。

そのほかに、作品には存在のみが示唆される親族関係の女性たちも多く存在する¹²。これらの事実から若衆や念者と親族関係にある女性の特徴は二つあることがわかる。一つは「こいきすぎたる女」とは正反対に姿や振る舞いが都風で雅ということである。もう一つは息子や兄への愛情が深く、健気ということである。

このように、武家の話を集めた前半(巻1～4)に集中して数多くの女性の親族が登場するのはなぜなのか。その理由は若衆の心得を説いた衆道論書『心友記』¹³(1643刊)の以下の記述を手がかりに考えることができる。

また知音あるに、その念人を、顔色にては思ひ振りあれども、心底は譏り給ふ少人もあるものなり。是は無生心といひて、畜類同前の評なり。それをいかにといふに、一度知音と結び給ふ上は、親子の契約を模ぶなり。それによつて知音と指す時は、

少人〔おやゆび〕〔こゆび〕〔さ〕の拇指と小指を指すなり。かく〔ごと〕の如く親子〔ふか〕ほど深ききえん氣縁を、子この身にて親おや〔おろそ〕を疎か〔おも〕に思ふものが、人間にてあるべきや。

衆道では義理や情けの心が重視される¹⁴。そのため、念契（男色の契り）とは親子の関係をそっくりそのまま真似て再現するものとされている。そして、親子ほどに深い縁を疎かに思う者は人間ではないと厳しく評する。

「親子の関係」といえば「父子」と「母子」の二つが想定される。『男色大鑑』は衆道を称揚するのでまず「父子」の関係が思い起こされるが、同時に次のような思想もその基盤にある。

あまねくこうぼうだいし弘法大師のひろめたまはぬは、人種ひとだねを惜しみて（巻1の1）
女道によだうあるによつてうつけし人種つきず。（巻8の5）

冒頭と最後の篇でくり返される「女性がいるから人種（血筋）が絶えない」という思想は『男色大鑑』のもう一つの柱である。武家社会において「家」の存続は前提であり、それに母親は必要である（6節参照）。

以上のように、親族関係にある女性たちは都風もしくは思いやり深く、健気に描かれている。この女性たちの描かれ方は儒教的道徳に基づく母親像や妹像が理想的に画一化された姿そのものといえよう。このような親族関係の女性たちが多く登場するのは、武家の衆道で重視される「家」を前提とした「孝」の性格を若衆や念者が備えていると強調するためだと考察する¹⁵。

3. 恋の主体としての女性

前半の巻の女性たちは人数が多く、それぞれの女性像で共通する性格をもっている。しかし、その集団に属する部分をもちながらも、より主体的に恋する女性が後半の巻で活躍する。恋の主体として描かれる女性は二つのタイプに分けることができる。一つは衆道で説かれる少人（若衆）の嗜みを実践するために人々から賛美される女性で、もう一つは恋煩いから死に至って若衆までも取り殺す女性である。主に後半の巻において、恋の主体として行動する女性は4人である。

賛美されるタイプの一人目は「色いろさわ噪ぎは遊び寺の迷惑」（巻4の5）の塚原清左衛門の娘である。外記（念者）は寺で仲間と遊んでいたところ、大蔵（若衆）の首を誤って打つ。外記が責任をとって切腹する間際、「十四五なる美女の、白き練被ねりかつぎせしが、外記げきに取りつき、みづか『自らも跡には残らじ』と思ひ極めし有様」を見せる。これが周囲の者の心を打ち、二人は夫婦となって暮らしたと本話は締めくくられる。許嫁であることから外記と共に死ぬことを決心した娘は、性別は女性でありながらも行動は武士のようで男性的である。このことから、娘は義理や情けの心をもつ若衆に近い存在であるといえる。

二人目は「情の大^{なさけ}盃^{おほさかづき}潰胆丸^{びつくりまる}」（巻6の1）の衆道好きの夫の妻である。「女はさかり三十一^{びけい}二の美形」で、三、四歳の子どもを連れている女性である。病床に伏す夫が伊藤小太夫に会えないと男泣きするため、「女の身にしてかなしく、世もまづしければ一^{ひと}入いたましく、せめては太夫殿に通じて、書捨ての物なりとも申し請けて、最後を心よくいたさせ参らせたし」と語る。このあと、「情^{なさけ}をしる人々、しばらく女の心ざしを感じて」と続けられる。このことから、女性は妻の立場でありながら夫が伊藤小太夫を恋する気持ちを思いやる、情知りの人物といえる。

取り殺すタイプの一人目は「命乞ひは三津寺^{みつでら}の八幡^{はちまん}」（巻5の2）に出てくる十四、五の病気の娘である。平井しづまは自らを見て思い悩む70歳過ぎの親仁に声を掛け、親仁の息子と逢うことを約束する。しかし、夜になって訪ねてきたのは娘であった¹⁶。しづまと契った娘は翌朝には死んでしまう¹⁷。しばらくしてから、娘の執念によってしづまも乱気して死に至る。若衆の情の心を利用し、騙る娘は賛美されるタイプとは異なって誠実さに欠ける。娘は執念で恋の相手を取り殺すことから、『源氏物語』の六条御息所や『道成寺』の清姫など、日本文学における古典的な女性の性格をもつといえる。

二人目は「京へ見せいで残り多いもの」（巻6の5）で鈴木平八を「恋力^{こひりき}」で道連れにする娘である。娘は舞台中に平八を思い詰めて気絶するも「なま心にて独りぐち／＼と胸にかためてとかず」、亡くなる。娘の平八を思う心が「なま心」と言いあらわされていることから、娘は思い切ることのできない者と読みとれる。平八も原因不明の病を患い、「幻^{まぼろし}にいと艶なる女の見え侍る」と語って絶命することから、前の女性と性質が共通している。

このように、恋の主体として描かれる女性は二つのタイプに分けることができる。一つは若衆のような心がけをもつために念者や衆道好きの夫と結ばれる女性である。ただし、その心がけの良さは、義理と情けの観点から評価されており、評価するのは女性と男性を見守る周囲の者たちである。もう一つは恋煩いから死に至って若衆までも取り殺す女性である。若衆と同じ心得をもつ二人の女性が賛美されていることから、『男色大鑑』では女性と男性の間にも男性同士の恋と同じ規則がはたらいっていることがうかがえる。

4. 群衆としての女性

後半の巻には「恋の主体としての女性」とは対極に位置する「群衆としての女性」も存在する。「群衆としての女性」は情景描写のなかに現れる場合や歌舞伎若衆のファンとして登場する場合がある¹⁸。

まず、情景の中に現れる女性から確認する。作者が登場する「京へ見せいで残り多いもの」（巻6の5）には、若衆方・鈴木平八に恋する女性が「山賤女^{しづめ}」（百姓女）、「一年たらぬつくもがみ」（老婆^{すみぞめ}）、「墨染^{すみぞめ}」（尼）と幅広い層に渡ることが端的に示されている。また、

「素人絵に悪や金釘」(巻7の5)は作者が岡田左馬助に誘われて地引網を見に行く話である。この話でも、出店茶屋の吉(文字が書けて歌学の心得もある)、茶屋の国、「人留める一夜女」(飯盛り女)、乳守の郭の名高い女郎とその禿らと職に就く女性のみが登場する。これらの女性たちは記録的な文章のなかで様子や職業のみが明らかであり、個別の逸話はない。

次に、歌舞伎若衆の愛好者である女性を見ていく。「声に色ある化物一ふし」(巻8の1)は作者が太鼓持や大尽と京都の茶屋町で遊ぶ話である。登場するのは巫女・梅の木の子、水茶屋の後家、遊山茶屋・大鶴屋の涼み床にいる女性たち、女方・藤田皆之丞を恋慕う井筒屋の娘である。井筒屋の娘は着物姿や髪型、団扇を持つことが細かに描写される「うるはしき女」である。井筒屋の娘が手紙を投げつけて「せめて言葉のかへしはないか」と涙ながらに訴える姿は、皆之丞を熱烈に慕っていることを印象づける。しかし、本話は「男女に限らずかく思はるるは、この君美しき徳の一つなり」で締めくくられることから、井筒屋の娘の逸話が主眼でないことは明らかである。これらの女性の話はあくまでも若衆の美しさを強調するために挿入されている¹⁹。

ほかにも、「姿は連理の小枝」(巻6の2)は女方・小桜千之助に宛てられた恋文について作者が一部始終を記した話である。本話では、女性は「女のまばゆく、しら／＼と顔見とむる人もあらぬ程にして」と千之助を直視できない姿のみが述べられる。この若衆の美しさを女性の反応によって強調する方法は、「江戸から尋ねて俄坊主」(巻5の4)、「情の大盃潰胆丸」(巻6の1)、「忍びは男女床違ひ」(巻6の4)、「心を染めし香の図は誰」(巻8の5)にも見られる。

このように、群衆としての女性は作者が登場する随筆風、紀行風作品の情景描写のなかで茶屋で働く女性や女郎、歌舞伎若衆ファンの女性である。歌舞伎若衆の周辺の女性たちは没個性的であり、記録的な文章のなかで描かれ、群衆としての性格をもっている。これらの女性たちは歌舞伎若衆の美しさ、芸風の素晴らしさを強調する目的で描き出されていると考える。

5. 男色の詳細

本節では「男色では本来的に女性を忌む姿勢が求められた」(1節註5)とされる「女嫌ひ」について考察する。なお、性的指向が男性のみに向けられる場合を「男色」、女性のみに向けられる場合を「女色」、男性と女性の両方に向けられる場合を「色道ふたつ」とした。「嫌われる女性」については男色の男性の性的指向によるものだと考えると理解がしやすい。田中優子²⁰は、『好色一代男』を例に挙げて、「好色が両刀であることは基本だった」と指摘している。また篠原進²¹は『男色大鑑』で描かれている性的指向について次のように述

べている。

「種の保存という目的」の対極にあるのが「男色」であり、「性」さえも美学へと昇華させた江戸期にあっては、LGBT も「性的少数者」を意味しない。既に見たごとくゲイは普通のことであったし、男たちはそれに耽る一方で遊郭にも通い、家庭では家の存続のためにせっせと子作りに励むといった二刀流、すなわちバイセクシャルだったからである。

田中、篠原によれば、江戸時代の色道では女性と男性の両方と関係をもつことは女色や男色と同等に存在したということである。

しかし、江戸期のすべての男性が「色道ふたつ」（バイセクシャル）であったということはない。江戸期のある男性は色道ふたつであり、ある男性は男色（ホモセクシャル）、ある男性は女色（ヘテロセクシャル）ということである。男性同士が性的関係を持つには、男色と色道ふたつの場合がある。

『男色大鑑』では前述（1 節）のように「嫌われる女性たち」がいる一方、男色の男性に受けいられる女性もいる（3.「恋の主体としての女性」参照）。たとえば、「情に沈むなまけ 鸛鵲あうむさかつき」（巻4の1）の長吉の妻がその例である。長吉は「西島第一の大臣」と呼ばれ、島原（遊郭）へ日参していた。太夫との交流も絶えて、今度は御所方から迎えた妻と深く親しんだ。ところが、この妻は出産中に息が絶えてしまい、長吉は深い悲しみに暮れる。後妻を迎えても少しも情けを交わすことをしない。それでも色の道はやめられず、「女は飽きた」といってその後は小姓を置いてすませた。男色は本話の末尾に「しかれども色はやめがたく、女はふつ／＼と飽きて、その後は小姓こしやうを置かれける」と僅かに述べられるのみである。小姓でも「埒らちのあく事にぞ（かたはつく）」と、小姓が妻の代わりになることで話が締めくくられる。遊郭へ通い、妻と深く親しみ、後妻も迎え、さらに小姓を置いたことから、長吉の性的指向は色道ふたつであることが分かる。

また、「言葉とがめ耳にかかる人様」（巻6の3）にも色道ふたつの男性が存在する。それは、滝井山三郎に恋心を抱く浪人である。浪人は男性である山三郎に恋をしているが、本話の冒頭では「扇あふぎをかざせし女」に心を惹かれ、ある家の女主人にも恋心を抱く姿が描かれている。

西鶴は男色を男性同士の恋としてではなく、それに加えて色道ふたつのあり方も描いている。その結果、男色の男性から見る女性像（嫌悪を伴うことがある）と色道ふたつの男性から見る女性像（嫌悪は伴わない）という二つの視点が作中に存在することになったのだろう。そのことを踏まえると、『男色大鑑』に描かれる女性が極端に忌避されたり、評価されたりと幅がある理由が分かる。それは、「若衆を好む以上、女色は忌むべき対象である。強い女性嫌悪の気配が、男色の世界には漂っている」²² というわけではない。男色

を詳細に見ると、男性同士の場合と色道ふたつの場合があるということである。おそらく、色道ふたつによる男性同士の恋では女性嫌悪は伴わない。

6. 希薄な父子関係

『男色大鑑』の女性たちを分析して、女性たちは男性が衆道に徹する人物であることを示し、若衆の素晴らしさを際立たせている存在であることが明らかになった。なかでも、若衆や念者と深い繋がりをもつのは親族関係の女性たちである。しかし、ここで一つの問いが生じる。若衆や念者の「孝」（親孝行）の性格は、なぜ母子関係によって表現されているのだろうか。ここでは、母親像から視野を広げて若衆や念者の父親像についても考えてみたい。父親の存在が示唆される篇は、「江戸から尋ねて俄坊主」(巻5の4)(浅之丞の両親)以外、武家の話が中心の前半の巻に集中している。

登場する父親たちは亡父、存命の父、若衆と関わる父親の三つに分けることができる。第一に、既に亡くなっている父親は「形見は二尺三寸」(巻2の1)の勝弥の父親・玄番(竹下新五右衛門に討たれた)、「傘持つてもぬるる身」(巻2の2)の小倫の父親(船中にて病死)、「泪の種は紙見世」(巻5の1)の大右衛門の父親(幼い頃に死別)の三人である。

第二に、存命である父親は「玉章は鱸に通はす」(巻1の4)の甚之介の父親・甚兵衛、「夢路の月代」(巻2の3)の三之丞の父親、「中脇指は思ひの焼け残り」(巻3の3)の万屋久四郎の父親の三人である。これらの父親たちが若衆や念者に働きかける描写はない。

第三に、若衆や念者たちと言葉を交わす父親は六人である。それぞれの篇を見ていきたい。「塙の中は松 楓 柳は腰付」(巻1の3)の玉之助の父親・橘十左衛門は「武道すぐれての男、古主にも惜しみたまへども、家老職の者との口論、是非なく城下は闇に立ちのき、時節の朝日を待ちぬ」という人物である。奉公に出る玉之助に対する十左衛門の姿と言葉は「名残の姿を見送り、『かまへて武士の心懸けは、命ををしむ事なかれ』と、この一言より外はなし」と述べられる。十左衛門は武士としての自覚が強く、忠義を重んじる人物と読みとれる。

また、「東の伽羅様」(巻2の4)には十太郎の父親である十助が登場する。十助は伴の市九郎が十太郎の伽羅の香りを所望すると「『悴子がたしなみ伽羅なれば、おもひもよらず』と、親仁つれなき返事に」という素っ気ない態度であった。しかし、恋煩いによって十太郎に臨終が迫ったときには息子の気持ちを市九郎に代弁して二人を結びつける役割を果たす。

さらに、「編笠は重ねての恨み」(巻3の1)では蘭丸の父親・長谷川隼人が登場する。隼人は十二人の子をもち、渡り初めにも選ばれたことがあった。しかし、ある年から勢いを無くして九人の息子を失う。そこで、家を捨てる覚悟から蘭丸を出家させ、自らは白山

の麓に分け入る。その際、「墨染すみぞめの姿にかへて我に一目」と蘭丸に言葉をかけている。隼人は「一人髪ぼつを断てば九族愛欲の罪をまぬかる」という諺によって蘭丸に一族の将来を託しており、家長としての意識が強い人物である。

そして、「色いろ噪さわぎは遊び寺の迷惑」(巻4の5)では大蔵(若衆)の父親・大中井兵部太夫、外記(念者)の父親・高岡川林太夫、外記の許嫁の父親・塚原清左衛門(存在のみが示唆される)が登場する。なかでも注目すべきは兵部太夫である。大蔵の首を打った外記が切腹を申し出たところ「兵部は我が子の事は外ほかになして、外記が命いのちの程をかなしみ、住持を頼み、大蔵がかはりにわたくしが子になして名跡みやうせきつがせたまき願ひ」をお上に訴える。ここでは、実父と実子の関係よりも若衆の父親と念者の義理の関係が描き出されている。最終的には兵部太夫が外記を我が子とする。許嫁の娘と結婚させて「その家いへをゆづり、親子かたらひをなしける」と締めくくられる。義理の親子関係が強調される特異な篇である。

このように、『男色大鑑』の父親は亡父、存在のみが示唆される父親、若衆と関わる父親の三つに分けることができる。しかし、父親たちの容貌、着衣などが描写されることはなく、性格の共通点もない。

最も考えるべき点は、母子の絆と比較して父子の結びつきが薄いことであろう。父子の関係が希薄なのは、なぜか。その理由は二つ考えられる。

第一の理由として、それは男色そのものが家父長を頂点とし跡継ぎを前提とした「家」制度を揺るがすためだと考える(2節参照)。『男色大鑑』冒頭の篇「色はふたつの物あらそひ」(巻1の1)では、弘法大師(衆道の祖とされていた)が衆道をひろめなかったのは、次に引用するように、「人種ひとだねを惜しみて」(人種が尽きる・子が生まれてこない)のことだという。

この道(筆者註・衆道のこと)の浅からぬ所を、あまねく弘法大師こうぼうだいしのひろめたまはぬは、人種ひとだねを惜しみて、末世の衆道を見通したまへり。

跡継ぎが生まれてこないで家の存続が危うくなることになる。

この「人種」については最後の篇(巻8の5)、『男色大鑑』の大団円でも次のように記され、首尾呼応している。

我が朝てうにては衆道専らに榮もつばなり。女道あるによつてうつけし人種さかつきず。人種(血筋)が尽きずに受け継がれていくのは「女道」(女色)があるから、ということである。男色を奨励することは、結果的に血筋を絶やすことになる。

また、「この道にいろはにほへと」(巻1の2)の一道の「それがし女好めば、月鉾つきぼこの町に歴々ちやうれきの入縁いりえあれども、かつて取りあはず」の言葉にも示されるように、女嫌いの一道は家族を構成することができない。よって、「家」制度すなわち家父長(父)を脅かすといえる。

次に、父子の関係が希薄な第二の理由は念契によって義理を結ぶ相手が存在する若衆や

念者にとって父親は不要であったためと推測する。『心友記』は衆道における義理が男性間で成り立つと示している。同書下巻には世間の人々が傍若無人で情けのかけ方を知らないときはどのようにするべきかという問いがある。返答では「まづ第一理非だいりひも分わかず、或は少人まへの前ひにしても卑詞・拙談せつたんいたし」²³と情けのない振る舞いが多く挙げられる。そして、最後に「これにては、人間の義理とはいはれまじ。」と人の道から外れているとまで戒められる。

さらに、同書では「主童しゅどうの治おさまれる間あいだなれば、殊ことなる道おとこの心そにまた男の儀理を添へて嗜たしなみ」と元服を控える頃（18歳からの3年間）には「男の儀理」による付き合いが重要であると説かれている。この「男の儀理」の内実については、衆道論書『よだれかけ』（1665刊）の記述から推測できる。同書では「此三年のうちは、いかにもおとなしく、たがひに道をたすけて、よろづの事にあやまらざるを道とす、これ主童の文字の心なり」²⁴と述べられている。

上記のように、義理とは元服を控えた大人らしさが求められる男性と男性の間に働く道理である。家父長制社会における男性間の連帯を示す概念として「ホモソーシャル」²⁵がある。ホモソーシャルとは、女性及び同性愛者を排除することによって成立する男性間の緊密な結びつきや関係性を意味する。『男色大鑑』の男色にもホモソーシャルと同様の構造が見いだせる。それは、父親と女色を排除することによって成立する男色の男性間の緊密な結びつきである。そこには互いに相手を思いやる気持ちだけではなく、人としての正しい生き方から道を踏み外さない道義も求められる。そのため、道を教え導く念者とそれを頼りにする若衆の関係は父子の関係にも重なる部分がある。これは「親族関係の女性」を考察した2節で引用した『心友記』に「一度知音〔たび〕〔ちみん〕〔むす〕〔たま〕〔うへ〕と結び給ふ上は、親子しんしの契約〔けいやく〕を模ぶなり」と説かれている通りである。父子の関係に重なる念者と若衆の主従関係は、衆道の理念によれば厳密には一対一の関係であるべきものである。よって、若衆から父親と念者の二つの方向に向けられる忠誠や尊敬、父親や念者から若衆に向けられる道義や規律は成立しがたい。

以上のことから、『男色大鑑』において父子の関係が希薄であるのは父子の関係が「念契」において代替されているためと考える。儒教的な道徳に基づけば、母親は息子に従う存在であるために息子と母親の絆が強く結ばれていても衆道を妨げることにはならなかった。対して、父親が父権をもつためには父親と息子のあいだで一種の主従関係が生じる。しかし、念契によって若衆の主の位置には念者が存在することになる。『男色大鑑』のなかでも集中して親族が登場する前半巻（武家の男色の世界）では、父親は男色の男性同士の絆からはじき出されることになり、父子の関係は希薄である。

おわりに

本稿では、男色という枠組みを通して『男色大鑑』のなかの女性像を分析した。その結果、西鶴が描き出す女性像、『男色大鑑』の男性同士の男色が父親と女色を排除する構造をもつことが明らかになった。

まず、『男色大鑑』の女性像は「嫌われる女性」、「親族関係の女性」、「恋の主体としての女性」、「群衆としての女性」の四つに分かれていることを明らかにした。前半の巻、後半の巻の女性像を要約すると次のとおりである。前半の巻の「嫌われる女性」は物をねだる出しゃばりな性格に造形されており、「親族関係の女性」は都風で健気、愛情深い女性である。前半の巻の女性は、若衆や念者が「孝」の性格をもち、衆道に徹する人物であることを強調している。後半の巻の「恋の主体としての女性」は西鶴の他作品にも見られる積極性をもっており、「群衆としての女性」は特徴的な個性をもっていない。後半の巻の女性は、男性と女性の間にも衆道で重んじられる情けの心が重視されることや歌舞伎若衆の美しさ、心がけの良さを示すために描かれている。

これら四つの分類から考えられる『男色大鑑』全体の女性像とは、各特定の集団の紋切り型であるということである。嫌われる女性像、母親像、恋する女性像、群衆像の画一化されたタイプは、若衆や念者の引き立て役として位置付けられている。そうして、男色、色道ふたつが混在する『男色大鑑』の物語世界のなかで、女性を嫌い、義理や情けを重んじ、愛を貫く衆道の道理を強固にすることに女性たちは機能している。嫌われている女性像が男色の女嫌いを強めることに機能しているのは、嫌われるだけの要因を女性がもっているという男色の男性側の論理によって描かれているためであろう。そのために、嫌われる女性たちは、あえて出しゃばりな性格や物をねだる振る舞いをしていると考える。

そして、嫌われる女性が「女嫌ひ」の対象になる要因は、男色の男性の性的指向で説明できると論じた。西鶴の描く男色は男性同士の男色だけというわけではなく、男色と色道ふたつが混在するものである。そのため、「女嫌ひ」とは男性のみを愛する男性の性的指向の現れであり、色道ふたつには「女嫌ひ」は伴わないであろうと考える。

さらに、『男色大鑑』では母子の絆が強く、父子の関係が希薄である要因も検討した。そして、次の二点を提示した。一つは「女嫌ひ」を基調とする男色は「家」制度を揺るがすものであるために、家長である父親と息子の関係は希薄であるということである。もう一つは「念契」とは親子の関係を模倣するものであることから、若衆や念者には同性である父親との関係は不要であるということである。父権をもつ父親と息子の主従関係は「念契」によって若衆と念者の関係に置き換えられている。

西鶴は封建的な価値観・倫理観に縛られずに恋する女性を主体的に描き出すことで知られている。しかし、『男色大鑑』は客体的な女性や古典的な性格をもつ女性が多く登場す

る世界である。そこでは母親と息子の愛情関係が濃く、父親との関係は希薄であった。

本稿で論じた『男色大鑑』の四つの女性像を西鶴の他の作品で検証することや、西鶴の他作品で描かれる若衆と両親との関係の検討は今後の課題としたい。

- 1 西島孜哉『近世文学の女性像』世界思想社、1985年、p84-p121
- 2 齋藤優香『『西鶴諸国はなし』における女性像』『学習院大学人文科学論集』(30)、2021年、p223-p253
- 3 趙賢廷「西鶴作品の中の女性像について ―《悪女》をめぐる考察―」『人間文化創成科学論叢』10、2008年、p4.1-p4.8
- 4 女性が登場しない（女性に関する記述や描写がない）篇は、巻1の4、巻2の3、巻3の2、巻3の5、巻5の3、巻5の5、巻7の1、巻7の4、巻8の2、巻8の3、巻8の4である。
- 5 板坂則子『江戸時代恋愛事情 若衆の恋、町娘の恋』朝日新聞社、2017年、p56-58
- 6 前掲書、p66
- 7 佐伯順子『男の絆の比較文化史——桜と少年』岩波書店、2015年、p68-p108
- 8 三橋順子『歴史の中の多様な「性」——日本とアジア 変幻するセクシュアリティ』岩波書店、2022年、p107
- 9 本稿における『男色大鑑』の引用は宗政五十緒・松田修・暉峻康隆校注・訳『井原西鶴集』2〈新編 日本古典文学全集〉67、小学館、1996年による。
- 10 「女方もすなる土佐日記」（巻7の2）でも土佐の男性が鞆の津の郭の女性や素人女性を酷評する。さらに、「素人絵に悪や金釘」（巻7の5）では「逶迤なる女の独り二人立ち出しに恋を覚ましぬ」と女性は嫌がられている。
- 11 僅かな記述によって存在が示唆される母親として「編笠は重ねての恨み」（巻3の1）の蘭丸の母親、「葉はきかぬ房枕」（巻3の4）の伊丹右京に心をかける母川采女の母親、右京に横恋慕する細野主善の母親がいる。
- 12 それは、「夢路の月代」（巻2の3）の三之丞の母親、「東の伽羅様」（巻2の4）の十太郎の母親と乳母、「雪中の郭公」（巻2の5）の浪人の母親、「中脇指は思ひの焼け残り」（巻3の3）の万屋久四郎の母親、「葉はきかぬ房枕」（巻3の4）の右京の母親、「身替りに立つ名も丸袖」（巻4の2）の専十郎の嬢、「待ち兼ねしは三年目の命」（巻4の3）の瀬川卯兵衛の姉、「色噪ぎは遊び寺の迷惑」（巻4の5）の外記の母親、「泪の種は紙見世」（巻5の1）の十郎右衛門の継母、「言葉とがめは耳にかかる人様」（巻6の3）の滝井山三郎を恋慕う浪人の母親、「袖も通さぬ形見の衣」（巻7の3）の戸川早之丞の母親、12人である。
- 13 野間光辰『近世世道論』〔日本思想大系〕60、岩波書店、1982年、p20-p21。以下、本稿での『心友記』の引用は本文献により、引用部の下線は筆者による。なお、〔 〕で囲んだルビは宛漢字をした際の元の表記。
- 14 森田雅也は西鶴が原拠『心友記』で多用される「情」を『男色大鑑』に摂取して多用していることを指摘している（森田雅也『『男色大鑑』における創作視点 先行仮名草子との関係より』『人文論究』38、1988年、p15-p32）。
- 15 ただし、「泪の種は紙見世」（巻5の1）の十郎右衛門と継母は十郎右衛門が「恨みを書き残して、行方もしれずなりにき」という関係だったので例外である。
- 16 この策略については「若衆は女性とは関係しないという義理があったので、衆道の者に女性が近づくためには男を騙る必要があったとの指摘がある（波平八郎「執心鐘入」と浮世草子——若松と「衆道」——」『沖縄県立芸術大学紀要』(14)、2006年、p189-p205）。
- 17 本篇では「この娘の母親」も登場する。
- 18 なお、前半の巻では唯一「待ち兼ねしは三年目の命」（巻4の3）に情景のなかの女性として遊山船に乗っている「都まさりの女中」が描かれている。
- 19 白倉一由が歌舞伎若衆の世界に女性が登場する意義について同様の指摘をしている。白倉は実際には若衆と女性の関係が多くあった社会において、西鶴は理想的な男色の精神美を描くために若衆から女性に対する愛は描いていないと述べている（白倉一由『『男色大鑑』——歌舞伎若衆の世界——』『山梨英和短期大学紀要』18(0)、1985年、p23-p25）。
- 20 田中優子『江戸の恋』集英社、2002年、p124
- 21 篠原進『『男色大鑑』のショーケース』染谷智幸・畑中千晶編『男色を描く 西鶴のBL コミカライズとアジアの〈性〉』勉誠出版、2017年、p19
- 22 註5、p56
- 23 註13、p18
- 24 国書刊行会編『江戸時代文藝資料』4巻、名著刊行会、1964年、p53
- 25 河口和也「ホモソーシャル」『女性学事典』岩波書店、2002年、p443

Abstract

The image of women in *The Great Mirror of Male Love*, or *Nanshoku Okagami* : a diluted father and son relationship

NAMIHIRA Hachiro¹⁾, SHIKEMBARU Asako²⁾

1) Okinawa Prefectural University of Arts

2) Okinawa Prefectural University of Arts Graduate School of Cultural Arts Studies Doctoral Student

The *Nanshoku Okagami* (1687) is an ukiyo zoshi (ukiyo storybook) by Ihara Saikaku. Previous research on the image of women in Saikaku's works has argued that his characters are independent women who are not bound by the feudalistic ethics of the time.

However, there are few references to women in the *Nanshoku Okagami*. Therefore, this paper examines the images of women and fathers in the *Nanshoku Okagami*. This is because Saikaku's views on women and patriarchs become clearer by analyzing how women and fathers are portrayed in this book, which is, however, mainly concerned with the portrayal of young men.

The analysis reveals the following:

Firstly, the images of women in the *Nanshoku Okagami* can be divided into the following four categories.

1. 'women who are hated'; 2. 'women in kinship'; 3. 'women who take the initiative', and 4. 'women as a crowd'.

1. 'Hated women' are so depicted because of the demands of masculinity to dislike women.

The presence of both disliked and accepted women in the work can also be understood by applying our contemporary category of sexual orientation (here bisexuality).

2. 'Women in kinship' appear to show that young people and *nenja* have the filial character emphasized in the *Shudo*.

3. 'Women who take the initiative' indicates that spiritual connections, such as those of the *Shudo*, are also valued in female sexuality.

4. 'Women as a crowd' are depicted in an immersive way to emphasize the beauty of the young Kabuki crowd and the excellence of their artistic style.

Secondly, the study also reveals that the relationship between father and son is less common than the relationship between mother and son in the *Nanshoku Okagami*. The study considers that the weak relationship between father and son is due to two factors. Firstly, that is because masculinity is based on 'misogyny', the family cannot be structured sustainably and the 'family' system is shaken. The other reason was that *giri* in the *Shudo* was a one-to-one male-on-male relationship, and fathers were unnecessary for young men and *nenja*. The relationship between the father and the young men or *nenja* is replaced in the *nenkei*.

